

日本山岳会 越後支部報

第 29 号

令和2年10月15日

発行 公益社団法人日本山岳会越後支部

発行者 桐生 恒治

新潟県見附市学校町1-9-19

TEL・FAX 0258-62-0148

広報委員長 佐久間 雅義

私の一枚

思い出の矢筈岳

越後支部創設70周年記念事業として21座の登山が2016年に行われ、その時知り合ったグループで川内の矢筈岳を計画し2017年に室谷から入山しました。生憎の悪天候で魚止山の次のピークで幕営して涙を呑んでの撤退となりました。翌年4月上旬再度挑戦も思わぬ新雪で難儀し三川分水峰で1日目の幕営、翌日は無風快晴の矢筈山頂に立ちました。下山するメンバーの充実感と疲労した足取りが雪面にシルエットで美しく写り、思わずシャッターを切りました。

撮影者 多田政雄



原点に戻ろう

新型コロナウイルスの猛威の中、支部の行事を中止しています。

富士山・北岳が入山禁止になり、近場の山は多くの登山者でにぎわい、首都圏に近い「平標山」・「浅草岳」は、駐車場に入りきれないほど車が溢れています。多くの山小屋は、感染防止で今年度の休業や定員の半分以上で営業しています。上高地を始め7月の豪雨で全国の多くの登山道は崩壊し、穂高の周辺では、連休中数人の登山者でテント場では人影がない状態です。

今こそ原点に戻り、山を見直す必要があると思います。支部創立者「藤島玄氏」の「尾根を攀じ、藪を分け、溪を渡って」原点である地元の山を見直すことが、必要だと思えます。

私の山の原点は、職場に入り山好きの先輩に誘われて五頭山に登ったことが始まりですが、小学生の時の弥彦登山の感動と学校行事で見た映画「マナスルに立つ」が、山人生の始まりです。

休日になると握り飯を持ち、村杉行きが一番バスに乗り、五頭山通いが日常になりました。私は下越の山しか知りませんが、私の山だと思いつつの山を、あらゆる登山道から登り、私なりに見えてきました。玄さんの原点である新潟から見える山を登るよう目標を立てて、山行を重ねてきました。自分の原点に立ち返り、地元の山を見直すことが重要だと思えます。

この状態は、自分の間は続くと思います。一人一人の行動が、社会に与える影響は計

り知れないと思います。

八ヶ岳の阿弥陀岳遭難事故は、コロナウイルス感染の疑いで、救助隊員は隔離されました。また、山小屋が休業中、無理の行動をし、救助要請をしたような事例が、多く発生しています。

自粛が続く中、足元から見直し体力を維持し、これからの山行を見つめる事もいい機会だと思えます。思う存分に山を楽しめることが、一日も早く来ることを願っています。

支部行事を中止しましたが、今年の「高頭祭」は、ウェストン祭と同じく有志で、碑に献花と献酒を行いました。来年こそ高頭祭や松明登山祭の再開を祈っています。

副支部長 小山 一夫



ハマナス咲く交易路 石花越(いしげえ)

藤井 与嗣明

ドンデン山(やま)から西へ、大佐渡山脈の主稜線と入川々、石花川によって区切られる標高六〇〇㍍から八〇〇㍍の山を、私たち山の仲間が石花高原と呼んでいる。主稜線の石花越から両津側は越路としての機能は失われていますが、海府側は石花自然歩道として登山道が整備され、人気の高いルートである。

この高原の石花越(八四〇㍍)やメット(夫婦)池(七三〇㍍)附近、追分近くの川内用水路(七〇〇㍍)などの高所に、ハマナスが点在しています。

ハマナスは海岸性バラ科の北方系落葉低木、外海府海岸のいたるところで見ることができます。

海辺のハマナスが何故、この越路にあるのでしょうか。これは海辺のハマナスの実を食べた牛がこの地で放牧され、あるいは鳥によって食べられた、これらの牛や鳥の糞から発芽したのではないかと言われています。

またこの越路は、海府から両津や国仲への海産物や生活物資購入のルートであったことから、運ぶ人によって食べられた種子が捨てられ、そこから発芽したのではないとも言われています。

昭和五〇年から六〇年代に石花集落のお年寄りからは、明治の終わりから大正、昭和の初めに海産物を運んだと話を聞くこと

ができました。その海産物はワカメ、ジンバソウ(ホンダワラの種類)などの海藻類や塩で、国仲の米とコイキ(交易)するため、この越路からトネ(刀根)を越えました。海府音頭に「外の海府の荒磯育ち。米のなる木はまだ知らぬ」と唄われたように米は貴重で、水掛かりなど条件の良い水田でしか収穫できなかった。

トネ越えに携帯した飯は、糧飯(かてめし)でリョウウブの粉・大根・ジンバソウの実などに米を混ぜて炊いたものや、シロモチといって、生米をつぶしてせんべい状にしたものを焙烙(ほうろく)で焼いたものでした。また「カレイ」も携帯したのではないかと考えます。カレイとは米を炊いて乾燥させたもの、『古事記』(七十二年)にも「御粮(みがれい)」と記録されています。平安中期以降は「ほしい」(乾飯・糲)といわれ、合戦時の兵糧米で陣笠に熱湯をかけて食べたと記録されています。この越路の尾根近くカレイ清水やカレイ川と呼ばれる湧泉や溪流は、まだ夜の明けぬうちに村をたつた海府の女たちが食事をした場所でした。

今、この越路からは放牧の牛の姿が見られなくなり、シラバ(芝生場)が後退し太古の山へと姿を変えようとしています。



石花越に憩う牛さんと 昭和57年(1982)10月17日



大佐渡主稜線石花越近く(886メートル標高点)から望む石花高原。放牧の終えた今は、大小の芝生場は望むことはできない。 昭和51年(1976)11月7日

新会員になって

後藤 邦子

この度、ご縁があつて入会させていただきました。ありがとうございました。

若い時から山に登り始め、社会人の山岳会にも入っております。仲間にも恵まれ、たくさんの山に登ることができました。それが今年にはコロナの脅威で、山岳会の活動も制限され、行きたい山に、行ってみたく季節に登ることがかなわなくなりました。3密回避とか、新しい生活様式とか言われています。山で?と思いますが、山岳会の在り方や登山スタイルが変わりつつあるのかもしれない。

そんな中、県内の山をひとり歩くことが多くなりました。久しぶりに歩く山々は変わっていません。春になると山菜が顔を出し、新緑に覆われ、雪が解けると花々が咲き始めます。秋になると紅葉を楽しめることでしょう。下界がコロナで騒いでいようと、自然は変わらずに私たちを迎えてくれます。当たり前ですが、私にとって山はコロナに翻弄されず心穏やかにいられる場所となってくれます。山登りを続けてきて良かったと、あらためて実感しております。山歴は長いですが、ただ登ってきただけというふうな気がします。皆さま方に教わることも多いかと思ひます。山のお話しもたくさんお聞きしたいです。早くコロナが収まり、ご一緒させていただく日がくることを願っております。今後ともどうぞよろ

しくお願いいたします。

和田 甲臣

長岡市在住の和田と申します。この度は妻と共に日本山岳会に入会させていただきました。ありがとうございます。私は大学のころ米軍の友人と青森県の八甲田山に登ったのをきっかけに登山を好きになりました。アメリカの人は、日本人よりも登山を含むアウトドアスポーツを楽しむ傾向があるようで、他の米軍の友人と富士山に誘われたりもしました。その後、当時同じ研究室にいた妻と出会い、彼女が山岳部に所属していたこともあり、数々の山に連れていってもらい、青春の思い出となりました。

今は子供が5人いるので、里山などをハイキングしています。2歳児と4歳児は途中で歩けなくなりますが、自分と妻はそれぞれ背負子を、上の子たちは食料などを背負って、山頂でのカップラーメンを楽しむにしています。普段見ない虫や花やキノコやらを見つけて立ち止まったり、曲がりくねった木に登ったりするので、通常の2〜3倍は時間がかかりますが、自然から学ぶことは多く、登山で得られた精神力は大人になった時にきっと役立つと信じています。

和田 星子

「家でゆっくり過ごせば良かったかな」

上がる呼吸。乳酸がたまると大腿四頭筋。大学の山岳部に入部してすぐの頃は、急勾配の登り口でよくそう思っていました。しかし登頂すると一気に体中をアドレナリンが駆け巡り、「次はどこに登ろうか」と意欲が湧いてきて、山の不思議な魅力に虜になってしまっていました。

青森県の大学で登山や野生動物植物の観察に没頭していたあの頃から10数年。結婚して家族が増え、今では2歳児から中学2年生までの5人の子を持つ母となりました。子育てに忙殺される毎日ですが、この度は由緒ある日本山岳会に入会するご縁があり大変嬉しいのです。今は飴玉を片手に子供を励ましながら登っていますが、数年後は双眼鏡を片手にあの頃のようにパワフルに活動できたらと思っています。

小根山 淑美

私が越後支部への入会のきっかけとなったのは、山岳ファーストエイド講習会で知り合ったTさんの紹介でした。

私が山岳ファーストエイド講習会に参加しようと思ったのは、山岳遭難等の現場に遭遇した時に少しでも役に立ちたい、また自分が山岳遭難に遭わないためにリスク管

理をしたいという思いからでした。この山岳ファーストエイドは、机上で学習した後、屋外でシナリオをもとに実践トレーニングをするものです。

私は、一般尾根歩き、沢登り、山スキーを楽しんでいます。それぞれリスクがありますが、そのリスクを回避する術を学びながら安全第一で山行できればと思っています。

残念なことに登山中の事故は、年々増加しており、体力不相応が原因となっているケースが多いようです。また私自身、コロナ禍の自粛生活で体力が落ちています。下界でのトレーニングをしっかりと楽しんで山行したいと思っています。

昨今はコロナ禍で県外の山に行きにくい状況にあるので、新潟の山を見直し、山行して行きたいとも思っています。越後支部の先輩方に、新潟の山について教えていただきたいです。

皆さま方のご指導、宜しく願ひいたします。



有志による高頭祭の開催

事業委員（高頭祭） 小林頼雄

新型コロナウイルス感染症の終息の見通せない中、各行事が中止や自粛要請となり、例年開催（7月25日）の県登山祭、高頭祭ともに中止が予定されました。

7月に入り、高頭祭を開催できないものかと、開催地弥彦から声掛けの思いから、密をさけ少人数で有志による開催をしたいと、支部長、事業委員長にお願いし、第63回高頭祭の開催にいたしました。

会員の皆様には、ご理解いただければと思います。



(写真提供 鈴木勝利)

閑話

（標高の高い山・低い山）

佐藤 芳英

私の手元にある冊子「日本山名総覧（武内正著 白山書房 1993年第2刷）によると、著者が国土地理院の2万5千分の1の地形図から山の名前や標高を一つひとつ拾い出す等をした結果、名前をつけられた山が全国に1万8千32あることが確認されたそうです。

当然、剣ヶ峰（富士山）の3776mで低山は標高5mの天保山（大阪市）だそうです。また、「富士山」と記す山は全国で16あり、最も多い名前は276もある「城山」だそうです。

さて、この「日本山名総覧」による当新



(写真は、「登頂証明書」からの抜粋)

潟県の最高峰は、小蓮華山の2769mで、低い山は上越市柿崎区にある城崎山（きざきやま）で標高は16・6mです。

しかし、新潟県の最も低い山は、城崎山ではありません。私が知ったのは最近ですが、皆さんの中にはもうご存じの方もいると思います。新潟の山で標高が最も低い山は、村上市塩谷地区にある「稲荷山」で標高は15・3mです。平成24年2月に国土地理院の地図に記入されました。山頂には、「稲荷神社」があり、10分程で登ることができます。

事務局からのお知らせ

1 支部行事について

- ・10月25日（日）…公募登山「信越古道 焼山展望台」▽中止
 - ・11月1日（日）…靴音・寄合の集い
 - ・「三条市下田 番屋山」▽新規実施
 - ・11月5日（木）…平日トレッキング
 - ・「三条市下田 番屋山」▽中止
- 2 「高頭祭60年のあゆみ（仮称）」の編集と発行について

コロナウイルス自粛要請で、山行主体のハード的行事が中止を余儀なくされています。この時期可能なソフト的の事業として支部伝統行事である高頭祭の歴史をまとめることにしました。編集作業責任者を遠藤顧問にお願ひし、12月発行で支部会員と関係者に配布予定です。

3 「高頭祭の歌」歌詞の募集について

高頭祭のあゆみ編集打合せで、高頭祭の歌を作りたいとの意見がありました。高頭翁寿像碑が弥彦山にあることから、昭和39

年「新潟国体の歌」の曲で歌詞を公募することにしました。来年3月末まで募集しますが、「新潟国体の歌」の歌詞は次の通りです。

「弥彦の山から 耀きくだる 燃えたつ 聖火に 気もはずむ 陽炎（カゲロウ）けりあげ 走れよ跳べよ 伸び行く力 ためすのだ 越路の大地に 勇まし愉（タノ）し 若人のうたげぞ 新潟国体 新潟国体」

4 支部会員の動向

- ・物故会員
本望 英紀（6672）新潟市 8月
 - ・支部会員総数 175名
- （2020年9月1日現在）

編集後記

新型コロナウイルスの影響で、越後支部の活動が今年の4月から11月までの行事計画が殆ど中止等となりました。また登山に関することでは、富士山登山道の封鎖や山小屋の休業等ありました。

このような状況下で支部報第29号を発行できるのも作成にご協力をくださった方々のお陰と思います。この場をお借りして感謝申し上げます。

紙面の都合上、一部の記事で割愛等をしたところがありますが、ご容赦くださるようお願いいたします。

（編集・佐藤 芳英）

